

## その 46

### 万葉ファンタジア

#### 『万世集から万葉集へ』(その 4)



延暦 4 (785) 年 8 月、持節征東將軍大伴家持が陸奥国多賀城で永遠の眠りについた 1 か月後、造営中の長岡京を視察していた藤原種継は何者かに矢を射られ翌朝息を引き取った。世に言う藤原種継暗殺事件である。種継は桓武天皇に重用され、前任の大伴家持の位も出し抜き、長岡京遷都の責任者となっていた。この暗殺事件の首謀者として、早良皇太子や大伴一族の継人らが捕えられ獄につながれた。そして、厳しい取り調べに、継人らは「家持が大伴一族らに種継を排除すべしと呼びかけ、早良皇太子に申し上げてから決行した」と自供したとされている。家持が唯一人頼りにしていた早良皇太子の運命は？そして、「万世集」、いや、「万葉集」の運命や、いかに？「万世集から万葉集へ」その 4、「言霊の精霊」の語りから再開する。

家持さまが亡くなった悲しみも癒えぬ間に、奈良の都大伴の佐保の館ではとんでもないことが起こります。藤原種継暗殺事件で捕らわれた継人らの拷問の末の供述に、大伴の大納言邸に役人たちが慌ただしく押しかけて来たのです。

「とどろ、とどろ、とどろ……とどろ、とどろ、とどろ……」

「大伴家持はおらぬか！家持はどこにおる？」

「ここにおります……」

「どこじゃ、どこにもおらぬではないか？……家持めは逃げたのか？」

「逃げも隠れもいたしませぬが、一体家持さまに何用と申されるのですか？」

「謀反の罪で取り調べじゃ」

「謀反？どのような謀反にございますか？」

「藤原種継どの殺害の謀反じゃ」

「そんなご無体な……家持さまは『明<sup>あか</sup>き心のものふ』にございます。そのようなことは決してあるはずがございませぬが、一体謀反にどのように関わられたというのですか？」

「謀反の首謀者じゃ。大伴一族の継人らが、家持めが首謀者と白状したのじゃ」

「謀反の首謀者？それこそ、ご無体な……家持さまは、陸奥の国府におられたのですよ。謀反の首謀者になれるわけがございません」

「いい訳無用じゃ。家持めは大伴一族の氏上であろう。謀反の首謀者として取り調べる」

「できるものなら、どうぞお取り調べください」

「よかろう、家持めはどこにおる」

「ここにおられます」

「ここ？……こことはどこじゃ」

「ここにございます……この壺の中にございます」

「何じゃと？この壺の中？家持は、この中におると申すのか？」

「はい、左様にございます」

「……ならば、家持めは、罪を悔いて自決したというのか？」

「いいえ、1 月も前に、陸奥は多賀城で亡くなり、骨となって帰ってまいりました。死んだお人が謀反を起こしたと言われるのですか？どうぞ、存分にお取り調べを……」

「なんと……それは真か？」

「多賀城の国府にお問い合わせになれば、いかが？」

「それは……聞いてみるとしよう……それでは、次は、何じゃ……『万世集』、いや、『万世集』を出せ！」

「『万世集』？……『万世集』？……にございますか？」

「いや、『万世集』じゃ……『万世集』を出せい！」

「『万世集』とは、何にございますか？」

「シラを切るのもいい加減にせい。橘諸兄と家持らが、万世に栄えるよう謀議を図った時の書じゃ。かつて謀反を企てたのではないか。その時の謀反の書じゃ、罪人の書じゃ」

「謀反の書？罪人の書？そのようなものは存じませぬ」

「知らぬ、存ぜぬとな。それでは、家の中すべてを探し出せ！」

「とどろ、とどろ、とどろ……とどろ、とどろ、とどろ……」

役人たちは、佐保の広い屋敷の中に散らばり、そこらじゅう家探しを始めました。それからしばらくして、役人が櫃を抱えて、大嬢のところにやってきました。

「文庫の天井裏に隠していたこの櫃は何じゃ？この櫃の中に隠し持っていた巻物は何じゃ？」

「たいしたものではござりませぬ。お調べになるほどのものではありません」

「何じゃ、と聞いておる！」

「歌集にござります」



大嬢役 下田麻美



「何！歌集とな？これぞ、『万世集』なる謀議の書であろうが！」

「とんでもございませぬ。ご覧ください……ご覧のように、ただの歌集にございます。『万世集』ではなく、『万葉集』という歌集にございます」

「……『万葉集』という歌集とな？」

「相聞歌などつまらぬ恋の歌ばかりです。戯れ歌ばかりで持ち帰るほどの歌集ではございませぬ」

「何！恋の歌？それに戯れ歌とな？どのような歌じゃ？」

「合歡の花で若い男を共寝に誘う歌とか、夫婦が別の男や女と共寝する歌会の歌とか」

「ウウ、それは羨ましい限りじゃ……」

「妻に遊行女婦の家に乗りこまれた男の歌とか……」

「何、それは他人ごとではないな」

「それに、何人かの男に言い寄られ思い詰めて身を投げる乙女の歌」

「それは、聞くだに哀れなことよ……」

「その反対に、男を狂わせる蜂のように胸が大きく胸がくびれた娘子の歌とか……」

「何、蜂のように胸が大きく胸がくびれた女？……そうか、われも、会ってみたいぞ……」

「それに、屎の歌……アラ、私としたことがはしたない、下の歌もございます」

「何？屎の歌？……それはちょっと読みとくないが……」

「ハイ、『倉を立てるから、お姉さん、屎は遠くでしてくれ』など、3首……」

「何？屎の歌が3首も？……何やら廁を借りとうなってきたぞ」

「鄙の地のケトバで詠んだ農民の歌もありますが、読んで見られますか？」

「ケトバ？……それは何じゃ？そもそも農民に歌など詠めるのか？」

「ケトバは、東国で言葉のことにございますが、素朴で良き農民の歌が数多ございますですよ……そう言えば、あなたさまのような、お役人の歌もございました」

「何？私たち役人の歌？」

「衣を乾す間もないほど働き過ぎて自殺されたお役人の歌……」

「何？働き過ぎて自殺とな？」

「あなたさまも気をつけられませ。だから、今日はこれでお帰りになられたらいかが？」

「そうか、確かに、このところ忙しいが……そのような歌集ならいいわ。それでは、これで引き上げるとす……じゃが、誰の歌集か？もしや幻の人麻呂さまの歌集か？」

「いえ、家持さまの歌集でございます」

「なに？家持めの歌集？またまた、言い逃れをするのか？」

「言い逃れとは……そのようなことはございませぬ」

「言い逃れじゃ！家持は、歌など詠まぬ、いや歌など詠めぬ無粋者というではないか？歌集などではなく、やはり謀議の書であろう！」

「いいえ、歌集でございます。20年以上も前の家持さまの歌集でございます」

「なに、20年以上も前の歌集？家持は、20年前には歌を詠っておったというのか？」

「はい……でも、ここ20年、30年は歌を詠ってはおりませぬので、どうぞお見逃してください」

「いや、家持は歌など詠っておらぬ。言い逃れじゃ。これこそが謀議の書であろう？」

「とんでもございませぬ。ご覧ください、すべて歌集でございます」

「これが全部家持の歌集と申すのか？ならば、すべて焼き捨てよ！」

「そ、それだけはおやめ下さい！他のものはどのようにしていただいてもかまいませんが、焼き捨てただけはお許しください！」

「ならぬ！すべて焼き捨てよ！」

「お待ちください！家持さまの歌集と申し上げましたが、他の皆さまの歌も収められております」

「他の誰じゃ？」

「代々の天皇のお歌……古の聖徳太子さまのお歌も」

「なに、大君や聖徳太子さま？畏れ多くも大君や聖徳太子さまのお歌も？」

「それに、藤原家代々の氏上のお歌……」

「藤原家のお歌も？……そうか、それは大変じゃ……ならば、持ち帰って、役所に預かりじゃ」

「お待ちください。これだけは家持さまの形見としてお見逃しください。何とぞ、たった1つの夫の形見としてお残しください。お願い申し上げます」

「ならぬ！没収じゃ！家財、財産のすべても没収じゃ。片っ端から役所に持ち帰れ！」

「……お待ちください！それでは一つお聞かせください。長男の永主はいまどちらにおりますか？」

「永主は今役所で取り調べ中じゃ？」

「何とぞ、永主だけはお許しを……」

「そうはいかぬ。家持の咎を認めるまでは厳しく取り調べる。それに謀反の首謀者の身内を許すわけにはいかぬ。いずれお沙汰があるから、それまで神妙に待つように……それ、そこにある罪人の遺骨も持ちかえるの



を忘れるでないぞ」。

こうして、家持さまは藤原種継暗殺事件の首謀者の 1 人として、生前にさかのぼって処罰され官位家財のすべてを没収されることになるのです。妻の大嬢が、家持さまから命に代えて守るようと頼まれた「万葉集」も、罪人の書として官庫の奥深く閉じ込められ。以後公けになることはありませんでした。そして、長男の永主まで隠岐の島に流罪となり、あろうことか、家持さまの遺骨もまた、永主とともに隠岐の島へ配流となったのです。

さて、その後の早良皇太子と万葉集の運命は、いかに……

この藤原種継暗殺事件は、その後桓武天皇を廃して早良皇太子を天皇とする企てとされ、早良皇子は皇太子を廃位され乙訓寺に幽閉された後淡路島に流刑となります。身に覚えのない早良皇子は、処分に抗いその後一切の飲食を絶ち配流の途中絶命します。その後遺骸は淡路島に送られ葬られました。享年 36、無念の死でした。

その後桓武天皇の周辺に不幸が相次ぎます。皇太子となった安殿親王の発病やその他桓武天皇一族の病死、疫病の流行、飢饉、洪水などが続き、遂には天皇も重い病に倒れます。それらは早良皇子の祟りとされ、幾度か怨霊鎮魂の儀式が執り行われます。そして、延暦 19（800）年、早良皇子は崇道天皇という尊号が追贈されて名ばかりの天皇に祀り上げられ、その墓は淡路島から大和国に移葬されました。

しかし、病の床に臥された桓武天皇の病状はいよいよ重くなるばかり。宮中に病氣平癒を祈る怨霊鎮祀の音が響き渡り、桓武天皇の死の床にも届きます。

「コウ、コウ、コウ」

「……呼ぶな！……やめろ！……早良、寄るな、寄るでない……すべて種継の仕業じゃ……分かった、早良、許してくれ……家持、許してくれ……われを許せ……」

弟早良皇子や無実の罪で処分した家持さまたちの祟りを恐れ、自らの死期を悟った桓武天皇は、こうして藤原種継暗殺事件に連座したすべての人々の罪を解きました。そして、この恩赦の日桓武天皇は崩御されたのです。延暦 25（806）年 3 月のことでした。

早良皇子の後に皇太子となった安殿皇太子は、間もなく即位し平城天皇となります。そして、死後もなお、無実の罪で処罰され、それから 20 年以上も経ってから恩赦となった家持の怨念を鎮めるため、天皇は官庫に没収保管されていた家持の歌集を侍臣に持ってこさせます。

「官庫の奥に誇りにまみれて 20 巻の巻物がございましたが、これにございましょうか？」

「書名はいかに？」

「ございませぬ。『序』もございませぬので、その由来も分かりませぬ」

「『序』がないとな」

「はい、いきなり、『雑な歌』から始まってございます」

「『雑な歌』……なんと、怖れ多くも『天皇の御製作歌』……『雑歌』ではないか」

「当時の令状によりますと、大伴家持さまの妻大嬢は……『万葉集』、いえ、『万葉集』と申し述べた、と  
なっておりますが、20 年以上前の状にございます」

「『万葉集』？……『万葉集』？……いや、『万葉集』よ。確かに大伴家持の歌集『万葉集』ぞ」

「家持さまの『万葉集』……？家持さまは、歌は詠まれなかった、と聞き及んでおりますが……」

「いや、かつて若き折、家持は歌読みの名手だったのじゃ……ならば……」

そして、平城天皇は、高らかに詔を発します。

「ここに『万葉集』を撰し、万世に相伝えるべし……」

それからちょうど 100 年後の延喜 5 (905) 年、わが国はじめての勅撰和歌集『古今和歌集』の序文の  
1 つ、真名序に、次のように記されています。

「平城天子、侍臣に詔して『万葉集』を撰ばしむ」

こうして、家持さまは復位し、没収された家財も戻されました。それまで、罪人の歌集として長い間眠って  
いた「万葉集」は、奇跡のごとく甦り、ここに陽の目を見ることになったのです。家持さまの万葉集最後の歌が  
詠まれてから 50 年近く、そして、家持さまが亡くなられたから 21 年が経っていました。

隠岐の島に流されていた長男永主も都に帰りますが、永主には子がいなかったため、神代の昔から続いて  
きた武門の名家大伴家はその後途絶えることとなります。大伴家は滅びますが、家持さまが残した歌の数々  
は、その姿を変えて「万葉集」として蘇ったのです。

また、古の柿本人麻呂歌集など、その後原本は言うまでもなく、その写本も出てくることはありませんでした  
が、万葉集には、人麻呂さまの歌 84 首とその歌集から、およそ 370 首もの歌が収められ、歌の聖人麻呂  
さまは、ここ万葉集の中にもみ、その姿をとどめることができたのです。人麻呂さまもまた、この万葉集によって、  
甦ることができたお一人でした。

かくして、「万葉集」は、歌集そのものが「蘇りの歌集」として現世に甦り、万世に語り伝えられることになった  
のでございます。

